

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

ピカジップ
PCAGIP II

1 PCAGIPの起源

多忙を極める学校現場で、先生方に評価の高いPCAGIP形式の事例検討会を、前号で紹介しました。このPCAGIPの前部、PCAはパーソン・センタード・アプローチ、Gはグループ、IPはインシデント・プロセスの略です。前半のPCA（Person-Centered Approach）は、近代カウンセリングの父といわれるカール・ロジャースが提唱した来談者中心療法のことをいいます。これを応用したエンカウンター・グループを、世界平和のために広めようとロジャースは晩年精力的に活動しましたが、志半ばで他界したのです。

2 学校臨床とPCA

このPCAは、ロジャリアンとして育てられた私のカウンセリングのベースでもあります。今、うつ広がりから認知行動療法が注目を浴びており、ブリーフセラピーやシステム論的家族療法も学校臨床では活用します。また、それぞれのケースに応じて箱庭療法、森田療法、自律訓練法や種々のリラクゼーション、メンタルリハーサルといったイメージ療法も有効です。また、心的ダメージが大きくトラウマとなって固着しているケースでは、EMDRを使用することもあります。さらに、問題行動を起こした生徒には、内観療法的アプローチを使ったりします。恵まれない成育環境の影響から心理防衛機制が幾層にも重なり、隠れていた素直な本心が表面に出てきて、真人間に変容していく姿に寄り沿えるのも、学校臨床の喜びといえるでしょう。

このようにさまざまな心理療法を駆使するのが、今の学校心理臨床の現場です。その心理カウンセリングの過程で、精神分析の理論も不可欠です。来談者の心の状態を理解し、心理臨床の過程で一体何が起こっているかを把握するうえで、フロイトが創始した精神分析学は、今も有用なのです。

3 小此木啓吾氏とPCAGIP

精神科医で慶應大学教授だった故小此木啓吾氏が主宰していた精神分析系の心理臨床講座に、3年間通い続けた日々は、心理臨床の無類の奥深さと面白さに魅了され、目からうろこの連続でした。先生が亡くなる3カ月前、小さくなった病身をおして、D.N.スターンの自己感の講

義をしてくれました。その際、情動調律に関連して、「事例研究発表の際、交流様式も大切だ。スーパーバイザーは絶対ではない、調律の様式がそれぞれの先生で違うから。今後は、発表者や参加者と、本当にコミュニケーションが取れているかが問われる」と語られたことがあります。これは2003年6月12日、今から11年以上前のことですが、このPCAGIP式事例検討会にも通じるコメントに、今さらながら驚かされます。

4 PCAGIPのルールと進め方

PCAGIPを行う際に、二つの守るべきルールがあります。一つは、「決して批判しないこと」二つ目は「個人的メモを取らないこと」。前者は、発表者を被告にせず、この発表体験を、現実の課題解決への意欲と知恵とが得られる経験にするためです。ファシリテーターは自由で安心感が漂うように進め、発言された内容は、書記が黒板に記述していきます。それらを参加者全員で共有していくのです。

場面の位置構成は、発表者の横にファシリテーターが座り、ほか8名前後の参加者が車座に囲みます。それ以外の参加者は、これらの主要メンバーを外側から包むように座ります。そして、黒板に3行程度にまとめられた発表者の「今の困りごと」に関して、8名の人たちが順々に質問していくのです。

それを繰り返す中から、問題の全貌が明らかになり、多様な視点と、どう課題に介入すべきかの示唆も生まれてきます。安全な雰囲気の中で、発表者の抱えるケースを、参加者全員が自分の問題として捉え関わっていく中から、連帯感や一体感も醸成されていきます。

かつての事例検討会では、経験豊富なスーパーバイザーが得意げにばっさり裁いてしまい、発表者が傷つくという場面を、私も何度か見てきました。スーパーバイザーが主役で、発表者は引き立て役にさせられる構造に、甚だ疑問を感じたものでした。

そんな折に、学校臨床心理士の全国大会で、村山正治先生のPCAGIPのワークショップに参加、「これは私が求めていたスタイルだ」と感動し、それ以来、被災地の高校でも実施してきました。この夏は、埼玉県内の中学校でも行う予定です。

今後も、ロジャースの志を糧とし、日夜奮闘される先生方のために、PCAGIPを活用し続けようと考えています。